

かわらばん

令和2年2月

第248号

ホームページ



心房細動、お早めに…

循環器内科 副部長 井内 敦彦

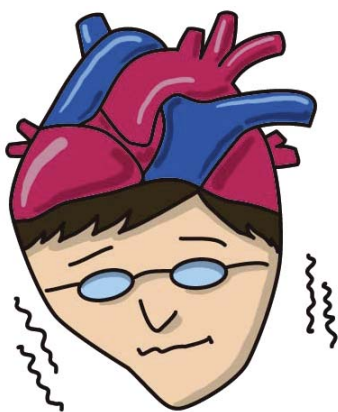
心房細動というのは文字通り心房が小刻みに震えるような、あたかも指揮者を失ったオーケストラのように不調和で乱雑な鼓動を特徴とする不整脈です。甲状腺ホルモンの暴走、加齢、遺伝や、高血圧、糖尿病、喫煙、大量の飲酒といった不摂生により、心臓に負担がかかることで起こります。心房細動は一度発症しますと、脈が急に増えたり、減ったりするために動悸を自覚するようになりますし、2割から3割くらい血液の巡りが悪くなることで息苦しい、ふらつくといった症状が出てきます。これまでと同じように動くと息が切れるため、運動を控えるという解決策を無意識に体得して症状がでなくなったという方もおられます。また、動悸や、息苦しいなんぞは汗顔の至りと辛抱していると、いつの間にかおさまってしまうこともあります。しかし、心房細動は治ってしまった訳ではありません。ひととき影を潜めただけであり、失念、放置していると再び頭をもたげてきて、その回数は次第に増え、その時間も次第に長くなって、やがては寝ても覚めても心房細動が続くようになります。

さて、心房細動も始まったばかりの頃には、その多くは肺静脈から出る異常な電気興奮がトリガーとなって発症すると考えられています。一方で、何度も心房細動を繰り返したり、心不全を繰り返したりしますと、心房の筋肉組織が壊され、心房が大きく変形して細動電位の旋回を維持するサブストレートが作られてゆくことになります。

心房細動に対する治療も目覚ましい発展を遂げていますが、現在のところ最も効果的と考えられているのはトリガーを抑えるアブレーション治療です。したがって、心房が壊され膨らみ、猖獗を極めてしまわないうちに、トリガーが主な原因と考えられる早期のうちにアブレーションで治療を行うことが重要であるといえます。

オーケストラも皆が楽器の名手であるのみならず、各パートがマエストロに合わせワンチームとなられなければ、こころ揺さぶられるような調律は生まれませんし、心臓も勝手気ままなリズムでは、その本来の機能は発揮されません。

「今か今かと」調伏されない心房細動と一緒に震えていないで、一度受診してみてもいいでしょうか。



紙巻きタバコから新型タバコにかえても健康被害は無くなりません。

アレルギー内科 主任部長 源 誠二郎

紙巻きタバコの健康被害が話題になってから長い年月が経っています。外来をしていて気づくことですが、徐々に禁煙されている人が多くなっています。一方で、紙巻きタバコから新型タバコに切り替えている人もいます。この新型タバコに切り替えることによって健康被害は本当に減るのでしょうか？

新型タバコには加熱式タバコと電子タバコがあります。加熱式タバコは従来のタバコの葉を加

熱することで煙を出さずに吸うことができ、パイプタバコに分類されます。一方で電子タバコはタバコの葉を使わずニコチンを含む溶液をエアロゾル化して吸うものです。日本では、電子タバコは薬機法により販売は禁止されていますので、新型たばこといえば加熱式タバコとなるそうです。

加熱式タバコの発がん性を示すニトロソアミンなどの「優先して排除すべき9つの有害物質」の含有量は紙巻きタバコと比べて約90%以上低減していると宣伝されています。確かに紙タバコと比べれば、健康を損なう可能性は低いように思えますが、加熱式タバコの有害物質と同じ量が化粧品から検出されれば即座に回収しなければならないほど大問題になるそうです。また



加熱式タバコを使ってもニコチン依存性が続きます。タバコによる健康被害は有害物質の量だけではなく使用期間にも大きく左右されます。加熱式タバコに変えて健康被害の心配が無くなったと考えるのは大きな間違いです。さらに、煙や匂いのために屋外で吸っていた人たちが屋内で吸い始めることによって、周りの人がその有害物質を吸い込む機会（受動喫煙）が増える可能性があります。このように考えていくと新型タバコに変えて安心というわけではありません。ぜひ、禁煙をお勧めします。

肺炎マイコプラズマについて

臨床検査科 副検査技師長 吉多 仁子

かわらばん令和2年1月号で感染症内科、永井崇之部長が書かれていた「‘インフルエンザの流行期が冬場’という一般常識が変わり、夏場の流行もみられる。」というお話に続き、かつて「オリンピック病」と呼ばれたマイコプラズマ肺炎についてお話ししたいと思います。

マイコプラズマ肺炎は、「オリンピック病」と呼ばれオリンピックが開催される4年毎に流行の周期を迎えていました。今年は東京オリンピックの年ですが、この周期性は最近では見られなくなりました。秋から冬にかけて流行することには変わりはなく幼稚園や小学校での流行は毎年小規模ですが起こっています。

マイコプラズマ肺炎は、マイコプラズマという細菌が原因で起きる呼吸器症状ですが、軽いかぜ症状からまれに髄膜炎や脳炎、中耳炎を起こすこともあります。マイコプラズマは細胞壁がないという特徴から特定の抗生物質が処方されます。

マイコプラズマの検査方法として、血液中の抗体を測定する方法もありますが、人が抗体を産生するまでには時間がかかってしまいます。

しかし、直接喉から採取した拭い液や喀痰からマイコプラズマを検出する迅速診断キット法は約1時間程度、感度に優れた遺伝子検査も開発され、その日のうちに結果をお返しすることができるようになりました。

インフルエンザのように予防接種のないマイコプラズマです。

手洗い、うがいやマスクの着用で予防を心がけましょう。



◆◆◆2月の教室案内◆◆◆

◆カンガルー教室	2月5・12・19日	午後1時30分～	第1会議室
◆アトピーカレッジ	2月7・14・21・28日	午前10時～11時	第1会議室
◆アトピー教室	2月7・14・21日	午後2時～3時	第1会議室